



日 口 交 流

発行 : 特定非営利活動法人 日口交流協会

E-mail:nichiro@nichiro.org

Home Page http://www.nichiro.org

〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-14 麻布台マンション401号

Tel : 03 (5563) 0626 Fax : 03 (5563) 0752



オレンブルグからのお客様

千葉 麻里

4年前の日本文化交流団で訪れたオレンブルグの国立大学日本情報センター長リュドミーラ・ドカシェンコ氏から、4月に代表団と訪日するというメールがきた。一行はオレンブルグ州政府など11名で松山市を表敬訪問した帰途に東京に滞在することだった。リュドミーラさん以外は東京は初めてなので一日観光したいということで、バスツアーで服部副会長が利用するKEN ドリームの伊藤氏にバスでの送迎や都内観光をお願いした。変更や細かい見積もりなどのことで何度も電話やFAXをしたが、いつも快諾してくれた。観光には留学担当の山田さんの知人で通訳ガイドの松下敬子さんが同行し、きめ細かい配慮で対応シタ方にも具合が悪くなったメンバーに病院へ付き添ってくれた。



夕方には、江守副会長が社長をしているケット科学研究所を訪問。技術部の大川恭史さんがロシア語の書かれた会社の製品説明や交流協会、ロシアとの関わりについてスライドを使って話してくれた。言うまでもないが、江守副会長はお父様はウラジオストックに赴任したことが縁でその後アイスホッケーの父と言われ、協会の会長も長年つとめられた。江守副会長ご自身もアイスホッケー部で活躍され、協会の財政危機は何度も救ってくださり、現在、会社はロシアに検査機器を輸出するなど、ロシアとの縁が深い。オレンブルグからの代表団は、州政府以外にスポーツ委員長や企業家同盟など様々な分野のメンバーがいたが、一様に強い関心を持たれ今

後一層の友好をかたく誓い合った。

社内の見学をした後、江守副会長の招待で懇意にしている寿司屋を貸し切った夕食会となった。本格的な寿司屋のカウンターで、寿司をにぎる大将と全員で乾杯。刺身が初めての方々もすっかり満足されたようで、焼酎を傾けながらよく召し上がった。そして、一人ひとり団員の皆さんがそれぞれ熱のこもった感謝の挨拶をされ、それを機に乾杯を重ねた。通訳をする内堀専務も感激していたが、どれも素晴らしい挨拶だった。

前日夜のチェックインでは疲れて厳しい顔が多かったが、この日の夜、迎えのバスに乗る皆さんの顔はすっかり満足しリラックスして楽しげだった。

翌日、早朝帰国の途につき、後日、またリュドミーラさんから丁寧な感謝のメールが寄せられた。そして、私たちはオレンブルグを再度訪問し日本文化紹介をすることを約束したので。(常任理事)

お願い

NP0 日口交流協会では、ロシアでの日本の伝統文化などの紹介、国内でのロシアに関する講演会、在ロシア人とのイベント交流など幅広い活動を続けております。これらの活動を一層推進させるために皆様からのご寄付をよろしくお願い申し上げます。一口千円から、いくらでも結構です。

振込先：郵便口座 00160-9-66486 加入者名：日口交流協会
連絡先：日口交流協会事務局 Tel:03-5563-0626

お知らせ

●ロシア人講師による充実したロシア語クラス生徒募集中

0からの入門クラス 毎週水曜 18:30～19:30

初級1クラス 毎週月曜 19:30～21:00

初級2クラス 毎週月曜 17:00～18:00

準中級クラス 毎週月曜 18:00～19:30

中級クラス 毎週火曜 18:30～20:00

ТРКИ入門 月2回木曜 19:00～20:30

ТРКИ2レベル月2回水曜 19:30～21:00

上級クラス 毎週土曜 10:00～11:30

原書講読中級 月1回土曜 13:30～15:00

*会員のみです。見学できますのでお問い合わせください。

●夏休み短期ロシア語留学

授業日：2017年8月7日(月)～11日(金)

場所：ハバロフスク、太平洋国立大学

費用：会員60,000円、一般70,000円

(午前中授業、午後イベント、寮、ビザ代含む)

*航空券、ホテルご希望の方等ご相談ください。

●第42回マトリョーシカ絵付け教室：6月11日(日)

●第43回マトリョーシカ絵付け教室：7月9日(日)

時間：13:00～16:00

講師：菅野エレナ

場所：田町駅みなとパーク芝浦、「リーブラ」2階造形表現室

会費：3,000円(5個セットの教材、講師代、お茶代含む)

*従来のセットや組板の他に、起き上がり小坊師やマグネットなどの新教材も入りました。6月11日から1ヶ月間、田町リーブラで作品が展示されますのでご覧ください。

●第10回懇親ロシア語合宿

第10回を記念して、札幌大学との合同合宿を行います。

日時：8月4日(金)～6日(日)2泊3日

場所：札幌大学

費用：会員19,000円、一般20,000円

(授業料、寮費、5日の食費、4日夕食、6日朝食代含む)

*お問い合わせ、お申し込みは協会事務局までお願いします。

Tel:03-5563-0626 E-Mail:nichiro@nichiro.org

ロシアと日本の学生生活の違い

丸島 暁

現在私は、ハバロフスクにある太平洋国立大学教育学院(旧極東国立人文大学)の日本語学科で日本語を教えている。まさか教育の最高学府で私が教鞭を取るようになるとは、人生何が起るかかわからない。

ロシアの大学と日本の大学を比較して、最も興味深いのは学生の就職状況である。ロシアの大学の卒業式は6月末にあるが、日本の大学生のように一斉に就職活動を始めて、卒業までに企業から内定をもらわなければ人生終わりだ、というような風潮は少なくとも私が勤務している大学にはない。また、4年生になっても通年授業に出席しなければならない。日本のように3年生までに必要な単位を履修して4年生は楽をしようとはいかないわけだ。

文化と習慣の違いと言ってしまえばそれまでだが、この違いはどこから来るのだろうと自分なりに考えた。まず、就職活動がないのはそのようなサービスを提供している企業がロシアにはおそらく存在しないということが考えられる。それと、日本の場合は大学を卒業して社会人になったら、あとは長い休みもなく働き続けなくてはならないという考えが支配的だ。そのため、春に入社する前の数ヶ月を人生最後の長期休暇と考え、ここぞとばかりに思い切り楽しもうとする若者は多いと思う。今後の憂いを断って、人生最後の長期休暇を楽しむためには、企業から内定をもらっていることが必須である。日本の大学生は自由に見えても、どの時期に何をしなければいけないのかということが、半ば慣習的に決められている。

その点、ロシアの場合は大学を卒業して社会に出ても会社



の夏休みが一月くらいあるのが当たり前なので、大学4年生最後の春休みが人生最後の長期休暇というわけではない。根詰めて大学生活を楽しまなくても、うらやましいことに今後の人生でいくらかでも休みが取ることができるのだ。そのせいか、ロシアの学生たちはどこか自由気ままながらも淡々としている印象を受ける。

どちらの大学生活がいいのか、というのは判断が難しい。ロシアのほうが個人主義的で若者らしい感じもするが、卒業後の進路が決まっていない学生も多い。日本の就職活動という文化も、より多くの若者に卒業後の進路を定めさせるためには有意義な部分もあるのだろう。

また、ロシアの大学生たちはサークル活動にあまり熱を入れていない。この点は大学生活すなわちサークル活動という日本の大学文化とは大きく異なる。そこで、私は大学で将棋部を作って活動を始めた。将棋という日本の伝統文化に触れることで、これを日本理解の一助とし、さらに日本人とのコミュニケーション手段を拡充しようという意図である。しかしサークル活動に熱を入れないロシア人学生のことだから、一人しか部員が集まらなかった。そんなわけでハバロフスクくんだりまで来てこの学生と近くの喫茶店で夜な夜な将棋を指すという生活を送っている昨今だが、ここまで来るのにいろいろと紆余曲折があった。それについてはまた別の機会に述べることにしよう。

(ハバロフスク太平洋国立大学・日本語講師)

5月9日は勝利の日だ

アンナ・オラロワ

5月9日、ロシアは大祖国戦争でナチス・ドイツに対する戦勝記念日の72周年目を祝福した。この日にロシア人達は1945年に戦争に勝利したことに対し、退役軍人を祝って、戦争がなくて「スパシーバ(ありがとう)」を言うために花を持って外に出る。

大祖国戦争勝利の象徴であるゲオルギー・リボンを鞆とコートにつけて、私達も5月9日にモスクワ中心部に毎年行われる軍事パレードを見に出かけた。軍事パレードがスタートした赤の広場には招待状がなければ入れない。だから、私達はモレンスカヤ駅を出て新アルバート通りの交差点に立って最新型戦車などによる軍事パレードの行列を待つようになった。

5月なのに冬のコートを着てきてよかった。気温は2度ぐらいで、今年の5月9日はモスクワの祭日の歴史上で一番寒かった。雨と雪の恐れで航空ショーが中止しされた。

それにしても目の前で戦車、装甲自動車、軍事的バスと今年始めて見せられたシロクマの映像のあった北極圏ゾーンの領空警備用の対空防衛システムが登場した。軍事パレードは



モスクワをはじめ、サンクトペテルブルク、ウラジオストク、サマラ、セヴァストポリなどのロシアの都市で行われた。

一時間のパレードが終わったら、モスクワっ子は町の散歩に出かけた。公園と小公園、喫茶店とレストランにて戦争時代の歌が聞こえた。「カチューシャ」、「スムグリヤンカ」、「青いプラトク」などの戦争の歌の言葉が、もう戦後第三代である現代の若者達にもよく分かる。

近年、5月9日にロシアの各地で追悼イベント「不滅の連隊」が行われる。市民達は、大祖国戦争の時に祖国のために戦っていた親族の写真を掲げながら町の通りを歩く。残念ながら、人波の中で退役軍人の顔があまり見られない。大祖国戦争の参加者の年齢がもう90歳以上で、大勢の方々が家に残った。

タス通信によると今年ロシア全土では約2500万人が祝祭行事に参加した。5月9日は800万人ぐらいの軍事パレード、追悼イベント「不滅の連隊」、夜の花火などを見にモスクワの通りに出た。

● 広報部宛、ご投稿、ご意見をお待ちしております

スタートアップ支援とスコルコボ

津田 憂子

ウェブサイトやテレビなどで「スタートアップ」という言葉を耳にされたことはありますか？日本語では、「新規事業」や「立ち上げ」という直訳になりますが、「比較的新しいビジネスにおいて急成長し、今までにないイノベーションを通じて人々の生活や社会を変えるような事業展開を行う」企業を指します。ちなみに、「ベンチャー企業」という言葉は、日本人が作った和製英語で、英語で「ベンチャー・キャピタル」と言うと、投資する企業や人を意味します。

現在のロシアでは国営企業等の力が圧倒的に強いと言われていますが、それでも、資源依存型の経済構造から脱却するためにイノベーションの創出は非常に重視されていて、その鍵の一つを握るのがスタートアップを通じた経済成長かもしれません。例えば昨年、ソフトバンクグループが英国の半導体大手ARMを約3兆円で買収することが明らかになりましたが、そもそもこのARMは1990年に10人強のスタッフで創業したスタートアップで、ARM設計のマイクロプロセッサが携帯電話の標準チップになった大成功スタートアップ事例の一つです。

さて今回は、このスタートアップがロシアでどういった状況にあるのか見てみたいと思います。現在ロシアのスタートアップで最も勢いがあるのはスコルコボであると言われていています。スコルコボ計画とは、メドヴェージェフ大統領（当時）が2009年9月に打ち出したロシアの近代化政策の一丁目一番地とも言える施策で、「ロシア版シリコンバレー」の創設を目指さずものです。現在はまだ、2020年の完成に向けた建設途上にあります。

スコルコボの主要ミッションの一つとして、スタートアップ企業支援が掲げられています。スコルコボにはロシア国内外の企業90社ほどが研究開発拠点を置いています。この中に日本のパナソニックロシアも含まれていて、パートナー企業として初めて日本からスコルコボに進出しました。ファナック株式会

社 (FANUC Corporation) もこうした動きが続いています。

さらに多くの企業の参入を目指して、写真のTechnoparkのような建物が建設中です。

このスタートアップ企業支援は、スコルコボの建設が始まった2010年と同時に開始され、7年ほど続いてきました。その間、スコルコボが支援したスタートアップ企業はのべ



1,400社にのぼり、1万 出典：スコルコボ側提供資料（2016年3月）7,700もの新規雇用が創出されたと言われていています。

スコルコボに進出するスタートアップ企業には各種特典が約束されています。例えば、通常だと給与の28%を社会保険料として企業が負担する必要がありますが、スコルコボに進出すれば企業負担は14%で済みます。その他、VATなど各種税も全額控除の対象となっています。

スコルコボでは毎年「スタートアップビレッジ (StartupVillage)」というイベントが開催されていて、今年で5年目を迎えます。2017年は6/6～6/7の2日間開かれますが、同イベント実施のためにかなりの額のお金が投入されているようで、ロシア政府の力の入れ具合も他のイベントと一線を画すようです。これはもともと、欧州最大のエキスポである「スラッシュ」の開催地であるフィンランドの関係者が企画したものでした。実は筆者は今年スコルコボで開催されるスタートアップビレッジ2017に参加する予定です。ロシアでどんなイノベーションが生まれようとしているのか、そのエッセンスに触れることができるかもしれないと思うと今から楽しみで仕方ありません。

(JST 研究開発戦略センター・フェロー)

発揮する場として短い記事などを書いてもらいたいとも考えております。学生にとっては、投稿した記事を日本にいるみなさんに見ていただき、またコメントをいただくということがあれば、日本語学習を続けていく上でも大きな励みになるのではないかと期待しております。



もし興味を持っていただければ

たら、ぜひ一度ページを見ていただき、クラスノダール・ロシアの情報を得る一助とし、また、コメントなどのやりとりを通して交流していただければ幸いです。みなさま、どうぞよろしくお願ひいたします。

*このほか、ロシアのSNS В Контактеにもページを設けております。「Япония в Краснодаре」(https://vk.com/japan_in_krasnodar)

このページは、クラスノダールの方に広く日本関連情報を提供するという趣旨で立ち上げ、基本的にロシア語で情報発信しておりますが、興味を持っていただければこちらもご覧いただけたらと存じます。(クバン国立大学日本語講師)

「クラスノダールにほんごLive」開設

はまだ あきふみ
濱田 韻史

みなさまこんにちは。ロシア南部の街クラスノダール市にあるクバン国立大学の日本語講師の濱田と申します。

このたび、Facebookページ「クラスノダールにほんごLive / Japanese language alive in Krasnodar」(<https://www.facebook.com/krasnodar.nihongo.live/>)を立ち上げたので、ご案内させていただきたく紙面をお借りました。

このページは、日本にいるとなかなか知ることができないクラスノダール（やロシア）の情報を発信すること、そして日本人やロシア人をはじめとした人と人との交流の場となることを期待して開設しました。

私が本原稿を書いている時点では、このページには山口県とクラスノダール地方の間で締結された友好協定や本学で開講した日本語体験講座、ランニングイベントについて掲載していません。今後は、本学での学生の日本語学習の様子やクラスノダール市の日本関連団体の紹介もしていきたいと思っております。

私が投稿するだけでなく、学生にも勉強した日本語の力を

《モスクワ・アラカルト45》

さらば「モスクワ放送」！

日向寺 康雄

Sputnik日本チーフアナウンサー兼翻訳員

今年は5月半ばを過ぎてやっと、チェリョームハの白い清楚な花が咲き始めた。例年この時期は、薄紫のシレーニ（ライラック）が周囲に甘い艶めかしい香りを漂わせる頃だが、蕾はまだほとんど眠ったままだ。明るく陽気なタンポポの絨毯も十分に広がっていない。5月9日、戦勝記念日の朝にはみぞれが降り、モスクワっ子を驚かせた。そのため赤の広場上空でのロシア航空宇宙軍機のパレードは中止された。そして、それを伝えた番組が、モスクワからの最後の音声放送となった。

「こちらはモスクワ放送局です！」というアナウンスが、九州の元炭鉱労働者によってなされてから今年4月14日で75年、ソ連邦崩壊、経済危機、技術革新の荒波に翻弄されながらも、放送は今まで多くの熱心な常連リスナーに支えられ、中波・短波による放送が中止となった後も、ポッドキャスト版と形を変えて、懸命に生き延びて来た。しかし5月11日を最後に新しい番組の収録は打ち切りとなった。サイトのアクセス数増加を至上課題とする指導部は、音声新番組は手間ひま費用がかかる割に、一週間でアクセス数が1千程度でしかない事に不満だった。「あなたが番組準備の時間をニュースや解説などの翻訳に宛てれば、アクセスは一日だけで2千は増える。そちらの『戦線』に移ってほしい」というわけだ。ロシアにとって戦略的に重要で安泰と思われたヒンドゥー語課があっさり廃止され、ロシア語課やペルシャ語課、パシュトー（アフガン）語課も危ないと言われている状

況で、いくら歴史的意義や象徴性を訴えても通用しない。スピード、効率、利便性、収益性がまず重視される中、期待されるアクセス数が見込めない言語課や音声番組には、もはや生き残るチャンスはないのだ。当然、単なるアクセス数だけが、相互理解や関係発展に貢献している現実的証拠なのかという問いが生じる。しかし現場にはそれをゆっくり論じ合う余裕はない。「他に伝えたい事を伝える」というモットーを掲げながらも、実際はアクセス数を増やしたいため、どうしても刺激のかつ挑発的で大衆迎合的な「受けるネタ」が優先されてしまう。旧モスクワ放送的な地道さは敬遠され「品位」はしばしば忘れられる。西側マスメディアで報道されない真実や見解を伝え、ロシアの立場を多くの人々に信じてもらい、正しく理解してもらおうと志しながらも、現状では一つ間違えれば、欧米の犯した過ちを単に後追いする事にもなりかねない。しかし、新しい技術により毎日非情にはじき出されるアクセス数という、実体があるようでない「絶対評価」に誰も逆らえないのが実情なのだ。ロシア革命から100年目にあたる今年、我々は、あれだけの犠牲を払いながら、人間として一体どれだけ進歩し、どこにいるのだろうか？ これからもモスクワからの声は、日本人達の心に届くのだろうか？ ここは自分がいるべき場所なのか？ オールド・ラジオファンは、自分の人生を振り返り、つい一人考え込んでしまう。

＜ペテルブルグ便り＞

屋根からの観光

大原 翔

サンクトペテルブルクの今年は春が遅いといわれながら、5月も終わりに近づくとさすがに地域暖房も切れ、晴天で観光日和となった。街の背骨たるネフスキー通りは観光客でごった返している。長期滞在中の身としては、観光客がネフスキー通りど真ん中で、恒例のすりにあわねば良いが・・・と心配しながら人の波をさけて歩く季節が今年もやってきた。

エルミタージュ美術館前の宮殿広場では、連日ながしかの国際会議やコンサートが催され、大がかりな舞台装置の組立と解体に大騒ぎである。ネフスキー通りに直角に交わるいくつかの運河は観光客を満載した遊覧船が所狭しと行き交っている。

そんな喧噪の旧市街を避け、自分の部屋にこもりソファに座ると、ガラス窓から隣の建物の屋根から数人の目がこちらを見ているのに気が付く。隣の建物は5階建てである。屋根伝いにこちらの建物に向かおうとしているらしく、泥棒かと思えばたやすく割れる。筆者のそんな心配とは関係なく、空は青く澄み切ったままである。

隣の屋根伝いにこちらに迫ってくる人の中の一人は、なにか説明をしているようだ。どうも屋根を歩きながら市内の観光ガイドをしているようだ。数人の行動をしばらく監視して



いるうちに、屋根から市内見物ツアーの広告(写真)が、あちこちの道路に書かれているのを思い出した。今日の怪しげな数人の団体はそれであったのかと安堵した。

旧市内の建物は古く、屋根は薄い鉄板でおおわれている程度で足場も悪くそこを歩くのは危険が伴う。高所恐怖症気味の筆者には、足場がしっかりしていようと、到底無理

な相談である。この屋根の上からの市内見物をする人たちの気持ちがわかりかねる。屋根の上に足をのせたとしても、足に気を取られ、観光ガイドの説明などうわの空となるだろう。他人の家の屋根を勝手に土足で歩くことは、防犯上の観点からも、大体、許可されているのであろうか。また、ただでさえ雨漏りが絶えない古い建物、屋根から見知らぬ人の足音が響くのは次の雨の日を憂鬱にさせることであろう。などなど、考えていると、この市内観光参加者は、屋根から屋根に飛び回り、彼らの目的は別のことを意図している催しなのかとも考えてしまう。観光は、足が地にしっかり着いたものにしてほしいと思う。

(ペテルブルグ在住・2017年5月記)

● 広報部宛、ご投稿、ご意見をお待ちしております